20年のあゆみ

SHITARA

設楽町のこれまでと、これから

CONTENTS

02 これまでの20年を振り返って
04 設楽町に人を呼ぶには？
06 町と人の新たな繋がり方
08 ダムのできる町として、今語る未来の姿
10 編集部が選ぶ設楽町のちょこっと手土産
11 おひら～故郷の味を、次世代へ～
12 アウトドアのまち したら
14 設楽町の新しい取り組み

2005 ▶▶ 2025

これまでの20年を振り返って

Our Journey So Far

設楽町は、平成17年の町村合併により誕生し、2025年で20年の節目を迎えます。この20年、日本は人口減少と高齢化が進み、地方の在り方が問い直される時代へと移り変わりました。インターネットや携帯電話の普及、自然災害の激甚化、価値観や暮らし方の多様化。社会全体が大きく揺れるなかで、地域に求められる姿も少しずつ変わってきています。

設楽町町長

土屋 浩

つちや・ひろし

設楽町は本年、旧設楽町と旧津具村の合併から20周年という大きな節目を迎えました。これまで地域を支えてくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

人口減少や少子高齢化の影響を受け、令和5年度には田峯小学校と田口小学校、津具中学校と設楽中学校を、令和6年度には清嶺保育園と田口宝保育園をそれぞれ統合するという苦渋の決断を重ねてまいりました。

また、平成21年に受け入れた設楽ダム建設工事の進展に伴い、町内の景観、更には町を取り巻く社会的環境も大きく変わりました。そんな中、移住定住推進や地域を盛り上げる住民団体が立ち上がるなど、住民の皆さんが主体となって持続可能なまちづくりに取り組もうとする前向きな動きが生まれてきています。この節目にあたり、設楽町のこれまでの歩みを振り返り、これからの設楽町の未来を共に考えるきっかけとして、この記念誌を発行いたしました。

社会情勢は必ずしも明るい話題ばかりではありませんが、だからこそ、心を寄せ合い、支え合いながら、誰もが笑顔で暮らせるまちを皆さんと共に築いていきたいと願っています。

設楽町議長

金田 敏行

かなだ・としゆき

設楽町合併20周年おめでとうございます。平成17年10月1日に旧設楽町と旧津具村が、少子高齢化や人口減少、地域経済の活性化といった社会課題に対応するため、行政サービスの効率化、住民生活の質の向上、広域的な視点でのまちづくりをめざして合併しました。

その後、平成21年には設楽町の重要課題である設楽ダム建設工事の調印がなされ、この町の環境と生活が大きく変わり始めました。合併当初は人口6,306人でしたが、設楽ダム水没のためにやむなく多くの住民が住み慣れた地を離れ、町内外に転居されました。その後の少子高齢化で現在は4,005人（2025年6月現在）となり、1 高校、1 中学校、4 小学校、3 保育園となりました。ダムインパクトビジョンに示された地域振興策も新しいステージに入ったように思われます。町議会としても、町が掲げる「アウトドアのまち したら」を始めとして、多くの若者を設楽町に呼び込み、町執行部とも手を取り合って、人口減少対策や活性化対策を日々検討していきたいと思っています。今後も町議会に対するご理解とご協力をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

未来に向けた、より魅力的な地域づくり

設楽町では平成28年度に「設楽町総合戦略」を掲げ、人口減少という課題に向き合いながら、これからのまちの姿を描いてきました。その一環として移住・定住の促進にも取り組み、補助制度の整備や移住フェアへの参加など、外への活動も続けています。

しかし、「毎年子育て世帯10世帯の移住者獲得」という目標には、届いていないのが現状。補助金や制度が移住の決断を後押しする場面もありますが、それだけでは〝住みたい〟気持ちが生まれるわけではないようです。暮らしたいと思える場所には、より深い魅力や、人と人とのつながりのある日常を育むことが必要なのかもしれません。〝住みたいまち〟として選ばれるために、未来への歩みが続いていきます。

持続可能なまちとして発展するための3つのポイント

1 また訪れたくなる町にしよう

設楽町の山や川、星空などの風景、ここに暮らす人々は設楽町にしかない宝物です。そうした自然や人々とのふれあいを活かして、訪れた人が心に残る体験をつくっていきましょう。設楽町は、「アウトドアのまち したら」をスローガンに、オリエンテーリングをはじめとしたさまざまな体験を提供し、町内外の関わりを生んでいます。

2 互いに支え合える仕組みをつくろう

助け合える町は、安心して暮らせる場所。住む人も、関わる人も互いに寄り添い、支え合うなかで、共に歩む関係が育っていきます。設楽町が受け継いできた歴史や暮らしの知恵を土台に、地域おこし協力隊など、町に関わるさまざまな人の力も取り込みながら、今の暮らしに合った形へと少しずつ更新しています。

3 町の未来を共に決めよう

町の未来は、役場だけがつくるものではありません。暮らす人それぞれの関わりのなかで、多様な視点と対話を重ねながら、少しずつ形づくられていきます。2024年よりアウトドアカレッジ※という場を設け、設楽町の未来を語らう機会を作っています。

※アウトドアを取り入れたまちづくりや地域活性化などについて、住民や事業者の皆さんとワークショップや意見交換などを行う場です。原則毎月第3水曜日の夜に開催しています。詳細は設楽町ホームページをご覧ください。

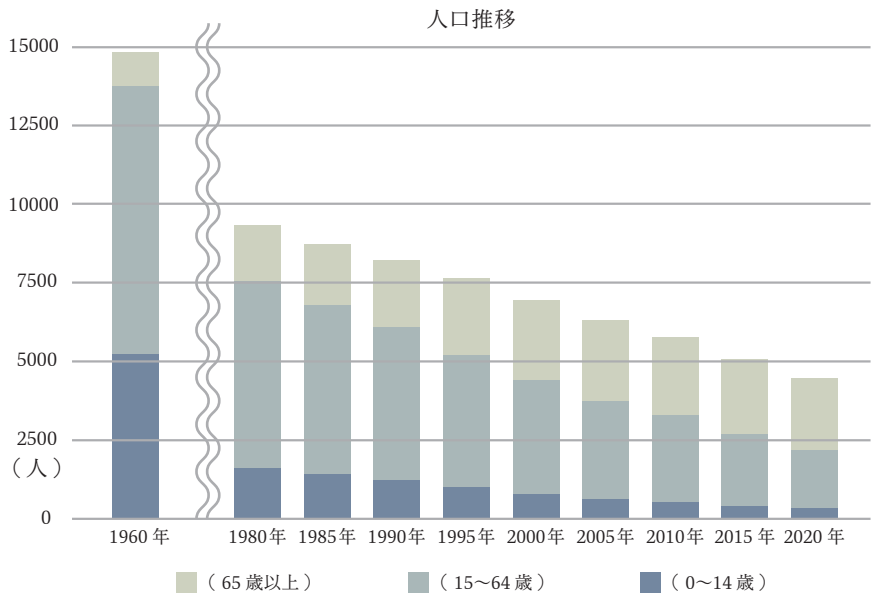
本気で考える！

設楽町に人を呼ぶには？

～繋がる先に広がる未来～

減り続ける人口、どう食い止める？

昭和35年に約15,000人だった設楽町の人口は、津具村との合併を経た平成17年には約6,300人に減少。そして20年後の令和7年8月、ついに4,000人を割り込もうとしています。さらに、昭和35年当時は10％未満だった65歳以上の高齢者が、令和2年の国勢調査では51.2％と、人口の過半数を占めるまでに。町では、子育て支援や移住・定住支援制度を整え、人口減少に歯止めをかけようと取り組んできたものの、「子育て世帯の移住者年間10世帯確保」という総合戦略での目標には届きませんでした。今回は、人口減少という共通の課題に向き合う名倉・津具・清嶺の各地区の団体が集い、座談会を実施。「設楽町に人を呼ぶには？」をキーワードに、地域の枠を超え、未来への糸口を探ります。



設楽町に人を呼ぶ

－設楽町に人を呼ぶための考えをそれぞれお聞かせください。

後藤　設楽町に人を呼ぶためには、個人の想いや熱意に基づいた活動が重要であると感じています。小さな繋がりがいくつもあることは素敵ですが、一人の力に限界があります。この地域に暮らす人の想いを掘り起こし、つなげていくことが人を呼び込むことに繋がると考えています。

松井　設楽町へ来て見て感じてもらうきっかけづくりが重要だと考えています。その手段として、設楽町の魅力や制度の情報発信を行うこと。それから、外から来た人を受け入れる受け皿とコミュニティづくりをすることが、人を呼び込むことにつながると信じています。

園原　地域住民が主体となって町の魅力やアウトドア体験を発信し、訪れるきっかけを創出することが大切だと考えます。

地域内の人たちとの繋がりと地域外の人との関係構築

－それぞれの団体が取り組まれていることが「呼び込むこと」に繋がっていますね！実際、町外の人との繋がりはどのように作られていますか？

後藤　私の場合は個人でも動いているので、２つのアプローチがあります。1つは自分が外に行って関わることで、こちらの活動を知ってもらい来てもらう繋がりをつくること。もう1つは、奥三河エリアの人材育成講座に参加している「何かやりたい人」に場所を提供することです。設楽町でイベントを開いてもらうと、その人が外の繋がりを持ってきてくれて、設楽町を知ってもらうきっかけとなっています。

松井　ここ数年は、まず自分たちの活動を地域の人たちに知ってもらうことに注力しました。やっとmatchboxの活動が知られ、協力してもらえる土壌ができてきたと感じています。町外の方にも知っていただくための活動として、「道の駅したら」のイベントに出店して焚き火やワークショップを行い、町外から訪れた方と気軽に交流できる場をつくっています。何度も来てくださる方もいて、新しい繋がりが生まれています。また最近では不特定多数の人に知ってもらう方法として、ポッドキャスト※を始めました。１回目の配信では、北海道や石川、長野の方から「設楽町を覚えておきます」とコメントをいただきました。

園原　Instagram や Facebook などの SNS を使って、活動の報告や津具地区の季節の移り変わりを紹介しています。ただ、それで新しく知ってくれた人をうまく繋げられていないという課題を感じています。最近では、役場の方が参加している移住フェアなどで、新しく移住してきた子育て世代の方々に体験談を話してもらう機会を作れないかと考えています。津具地区で子育て中の方々のリアルな話から「一度、設楽町へ行ってみたい」と思えるきっかけになると思っています。

※インターネット上で配信されている音声コンテンツが楽しめるサービス。

津具どっとこい
津具地区在住
園原 真さん（そのはら・まこと）

×

naguraそらのしたproject
名倉地区在住
後藤 理恵さん（ごとう・りえ）

×

清嶺地域振興プラットフォーム
matchbox
清嶺地区在住
松井 祥悟さん（まつい・しょうご）

POINT

01．地域に住む人たち自身が楽しめる環境づくりを基盤にする

02．関係構築の先に既存のイベントや場所を活かして、草の根的に活動を続けていく

団体紹介

農業

津具どっとこい

津具

農業体験や子どもの遊び場作りなどを通して、子育て世代の移住・定住を推進し、地域の活性化を目的とした活動をしている。

子育て

naguraそらのしたproject

名倉

旧名倉保育園を活用して、小規模イベントや園庭開放など、大人が安心して子どもと過ごせることを目指した交流の場づくりを行う。

暮らし

清嶺地域振興プラットフォーム matchbox

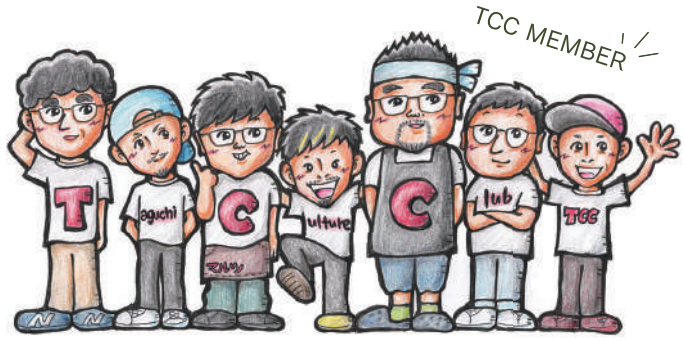
清嶺

道の駅したらを中心に、地域イベントや体験の場を通じて町内外の人々との交流を深め、関係人口を増やす取り組みを進めている。

関係人口の新しい形

町と人の新たな繋がり方

自分たちの「楽しい」が伝播し、人々の交流を生み、気づけば自然と地域に貢献しているTCC。近年は、移住に限らず地域と多様なかたちで関わる人々を「関係人口」として捉える考え方も広がっています。TCCの活動は、これからの設楽町を考える入り口として、大きな役割を果たしています。今回は、この活動のはじまりから、これからの展望についてお話を伺いました。



原田さん　近藤さん　加藤さん　原田さん
伊藤さん　夏目さん　中野さん

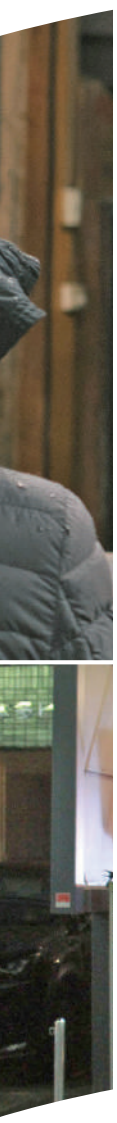
What is TCC?

まちづくり　教育

TCC（田口カルチャー倶楽部）とは？

田口地区を拠点に、2018年から活動を続けている地域団体。設楽町出身のメンバーで構成され、町内外のイベントにも積極的に参加している。

地域の皆で、楽しい場を作りたい



現在、シルクスクリーンの作業場所は山八商店（米販売）の車庫をお借りしています！

2018

TCCのはじまり

きっかけはメンバーの一言から

始めたきっかけはメンバーの伊藤くんから「シルクスクリーン※をやりたい」と相談があったことです。活動を始めた頃は活動資金もなく、マルツ田口店（スーパー）の閉店後にお店のバックヤードにトートバッグやTシャツを持ち寄り独学で印刷をしていました。やがて設楽町外からも注文をもらえるようになり、さらには一緒に参加してくれるメンバーも少しずつ増え、街のイベントにも出店するようになりました。またそこで出会う人たちが田口を訪ねてくれるようになったことで、人と人の繋がりも広がっていきました。

※メッシュ状の版にインクを通過させる穴を作り、その穴を通してインクを押し出して印刷する方法。

2022

地域イベントの企画

田口ロード開催！

TCCでシルクスクリーンの活動を続ける中で「もっと田口の町を知ってもらいたいね」と話し合うようになり、それが2022年より企てる田口ロードにつながりました。出店先で出会い自分たちの想いに共感してくれた方たちが名古屋や豊橋、豊川、浜松など様々なエリアから集い、かつて宿場町として栄えた田口を舞台に、昔の賑わいを思い出す新たな価値を創造するイベントになっています。出店してくれる方たちが楽しく携わってもらえるよう、空き店舗や賛同してくださる店舗の方に交渉し、出店場所を探し、遊びに来た人たちには田口の町を歩いて周遊できる仕組みづくりを行いました。開催を日曜日と月曜日とし、休日と平日の田口の景色を楽しめるようにしています。2023年からは田口小学校の子どもたちが授業の一環として遊びに来てくれるようになりました。さまざまな企画を通じて、参加者の笑顔が溢れ、地域の活性化と人々の絆を深める大切な機会になったと感じています。

2025年の開催は10月19日（日）・20日（月）を予定。

田口小学校の授業の一環となったのは想定外！　子ども達の笑顔が嬉しい

こうして学校教育と田口ロードは繋がった

田口小学校：後藤 克史校長
（ごとう・かつし）

校長先生の想い

田口ロードが子どもたちの職業体験する場に

TCC の活動を知り、若い人が人の拠り所を作りたいと考えて行動した事に感化されて学校として何か出来ることはないかと模索しました。田口ロードには町外からの出店者も多く、子どもたちが職業を体験する場として「ぜひ参加させてほしい」とお願いしました。実際に参加すると、大人が子どもたちに対し、熱い思いを持っていることを直接感じることができ、多くの魅力的な要素がありました。今では田口ロードを通じて、総合学習の一環として訪問授業に来ていただいている出店者の方もいます。TCCの活動が子どもたちの可能性を大きく広げていると実感しており、今後、この活動を見て育った子どもたちがどう成長していくのかが楽しみです。

イベントがまちづくりのヒントの場に

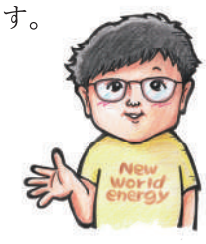
2025

TCC の現在地

設楽町で共に歩む

自分たちの楽しみが、いつしかまちづくりの一端にも繋がっていることを実感しています。ゴールを決めて進む方法ではなく、設楽町内の方たちと外から来てくれる人たちの交流が自然派生しながら心地よく広がっていることで、「設楽町に来たら何かやれる」という気持ちが生まれたり、「誰かの“やりたい”の実現方法を共に考えよう」といった、動きに繋がっていると感じています。

この町で育った方にとっても「田口でも楽しいことができる！」という気づきがUターンにも繋がると考えています。



next stage

これから

田口ロードを起点として未来へ

TCC の活動は、これからもシルクスクリーンの活動を軸としながら、田口ロードの開催を企てていきたいです。このイベントを町外から遊びに来てもらえる場、そして町をより良くするアイデアを試す場となり、設楽町のまちづくりを考える１つの機会となれたらいいですね。これからも、みんなでワクワクすること、「楽しい！」と思う気持ちをエネルギーに走っていきたいと思っています。

photo：牧野沙紀、鈴木佑奈、fujico、TCC
illustration：村松有希

旧八橋小学校跡地にある設楽町指定天然記念物「ウバヒガンザクラ」

Shitara Dam

ダムのできる町として、今語る未来の姿

設楽ダム対策協議会会長である金田直孝さんに、
ダムができる未来への想いをお話していただきました。

お話を伺ったのは

金田 直孝さん（かなだ・なおたか）
元八橋区長 / 現設楽ダム対策協議会会長

八橋地区について教えてください。

昭和30年代から40年代には3世代、4世代が一緒に暮らし、人口は1,000人を超えていた地区でした。運動会は特に盛り上がり、集落対抗リレーには10代から60代までのメンバーが参加し、芸能人を呼んでの歌謡ショーも行われていました。行事を通して住民の団結力が強い集落だったと思います。林業の衰退や一極集中の時代に入り、親たちは子どもに都会で大成するように促すようになりました。集落の衰退にはダム建設の話も影響しましたが、それよりも時代背景の方が人口減少の大きな要因だったと思います。

この場所ではどのような思い出がありますか？

この桜の木の下で授業を行ったことが良い思い出の1つとして残っています。今では散り散りになってしまった集落の人々も花見の時期になると、この桜の下に集まってきています。この桜の木には一人一人の思い出もあるので、ダム完成後もこの地が公園として残ることで、後世にもここに集落があったんだという記憶をつないでいけたらと思っています。

ダムの完成への想いと、理想に描く未来の姿について教えてください。

この周辺は、ダム工事に伴い多くの木を伐採したことで開けた土地となりました。陽が良く入る場所もできたことで、明るい印象を持つ方も多くなったのではないでしょうか。このように、環境が整うことで地域の発展も期待できると思います。この地で生活の糧を見つけられるようにしていくためには、住んでいる人々だけではなく、外から来た人々との連携も重要です。この頃では都会の人々の価値観が変わり、田舎の良さにも気づく若者が増えてきていると感じます。昔は「田舎は不便だ」というマイナスイメージが強かったと思いますが、今は「自然が豊かで生活がゆったりしている」とプラスのイメージに再評価されているように思います。これまでは50年後、100年後という長い目での話をしていましたが、今の時代は10年後の見通しすらつかないほどです。そんな社会背景を理解して持続可能な地域づくりが求められていると感じています。

これからの設楽町に大切なものとはなんですか？

ダム湖ができると、この土地に訪れて足を止める人も増えるのではと思います。

写真で振り返る、設楽町の風景

1 2 3 4 5

1_ 豊橋鉄道田口線の終着駅であった田口駅。**2**_ 大名倉地区と他の地域とをつないできた大名倉橋。**3**_ 棚田が広がる松戸集落。**4**_ 小松地区に建てられていた天道神社 **5**_ 設楽ダム建設に伴い、2025年2月11日に伐採作業が行われた添沢のヌマスギ。

photo 1~4：設楽ダム水源地域対策協議会　5：Keita Kushima

そのため第一印象が大切だと思います。ここには何もないと言う住民もいます。確かに都会のように何でも揃っているわけではありませんが、設楽町には雄大な自然が身近にあります。それらのすばらしい資源を活用し、自然を体験するモデルコースを作り情報発信をうまく行うことで、もっと魅力的な町になると考えます。派手な建造物を大きく作るのではなく、人が集まれる小さなカフェや小規模な宿泊施設が増え、イベントやアクティビティを通して人々が楽しむ場が町中にできれば、設楽町に行けば楽しいことがある！　と思われる町になっていくのではないでしょうか。

設楽町の未来に向けて一言お願いします。

　これから先もこの“ウバヒガンザクラ”の下に人々が集まり、「きれいだね」と温かな笑顔があふれる場として残っていくことを願っています。同時に第一印象づくりと情報発信を積極的に行い、設楽町がいつまでも持続可能なまちになってほしいと思います。

設楽ダム概要

　設楽ダムは、愛知県北設楽郡設楽町の豊川に建設中の重力式コンクリートダムである。堤高129m、堤頂長 360m、総貯水容量は約9,800万 m³。洪水調節、流水の正常な機能維持、水道・農業用水の供給を目的としている。流域の治水・利水に貢献するほか、水源地域対策特措法に基づき地域振興も併せて進められている。完成は 2034年度予定。

[設楽ダム完成イメージ図]
国土交通省 中部地方整備局 設楽ダム工事事務所

ヌマスギがつなぐ未来

かつて添沢温泉の宿の中庭にあったヌマスギ。愛知県内でも最大級と言われており、設楽町の文化財にも指定されていましたが、設楽ダム建設に伴い、2025年２月11日に伐採されました。※ ヌマスギは、ヒノキ科ヌマスギ属に分類される落葉針葉樹の一種。秋になれば美しい黄金の葉が風に舞う景色を演出し、かつて設楽町に森林鉄道が走っていた時代には、温泉とともに訪れる人たちの晩秋を楽しませていました。そんなヌマスギの伐採決定までは紆余曲折あり、残す方法として木の移植も検討され、樹木医による調査など、専門家たちの話し合いがありました。しかし、ヌマスギの周りの環境が変わったことが大きな要因となり移植は叶わず。ただ、このヌマスギの二世を育てる試みとして、挿し木用の枝が採取され、ヌマスギを未来へ繋ぐ実験が実施されています。

※上記写真５参照

編集部が選ぶ

ちょこっと設楽町の手土産

Gifts from Shitara Town

友人の家に遊びに行くときや親しい人のご自宅に招かれたときに、ちょこっと気の利いたお土産を持っていきたいもの。今回は編集部が設楽町以外の人に会うシーンをイメージして選びました。

美味しいものが好きなあの人へ

もっちり食感とまあるいフォルムが特徴のベーグル。種類によってお食事にもおやつにもなるのも魅力で、手土産に嬉しい。清崎の【ベーグルSan。】では定番のプレーンベーグルからベーグルサンド、季節のフレーバーとさまざまなラインナップがあり、贈る人を思い浮かべて選ぶ楽しさもあります。

新生活を始めたあの人へ

木製のカトラリーは、熱くなりすぎず、冷たくなりすぎず、口当たりのやさしいことが特徴。清崎にアトリエを構える【トキ】の木製カトラリーは、1つ1つ手作業で仕上げられ、やわらかな質感とフォルムが魅力です。

お料理が好きな自然派のあの人へ

季節ごとに巡る設楽町の旬の食材。【道の駅したら】【道の駅アグリステーションなぐら】の農産物直売コーナーに並ぶものは、そのときの旬を教えてくれる。大きさも形も違う様々な食材をどう調理してくれるのか、楽しみも広がります。

お酒が好きなあの人へ

時期によって変わる、蔵元でしか味わえない生原酒の量り売り。【関谷醸造】の酒蔵と隣接しているお店だからこその逸品でお酒好きな方達に喜ばれます。水の美味しい設楽町ならではのもの。

おひら

故郷の味を、次世代へ

「故郷の味」というとどんな料理が浮かびますか？　今回は正月料理として食べられてきた「おひら」をご紹介します。具材や作り方も各家庭で少しずつ異なる年取りの煮物。大晦日から新年にかけて大鍋でたくさん作り、大勢で食卓を囲む風景は、未来へと繋げていきたいものです。

材料（直径 30cm 鍋 1 杯分）

里芋	10 個	干し椎茸	15 個	糸昆布	1 袋
大根	1 本	木綿豆腐	2 丁	煮干し	100g
人参	3 本	油あげ	8 枚	［調味料］	
ごぼう	2 本	ちくわ	10 本	醤油	200ml

下準備

- 干し椎茸は前日から水で戻す（戻し汁も出し汁として使う）
- 煮干しは頭と腹わたを取り除いておく

作り方

大根は洗って皮をむき、厚めの輪切りまたは半月切りにし、下茹でする（お好みの形で良い）

里芋、ごぼう、人参もそれぞれ洗って皮をむき、やや大きめに切る

豆腐、油揚げ、ちくわも大きく切る

鍋に煮干し、大根、里芋、ごぼう、人参、椎茸、ちくわ、木綿豆腐、油揚げを順に並べるように入れ出し汁を注ぐ（具材がひたひたになるくらい）

1 番上にさっと洗った糸昆布で蓋をするように敷きつめる

蓋をしてコトコトとじっくり煮る。煮立ってきたら醤油で味付けをし、全体に味が染み、色が付いてきたら完成

今回教えていただいたのは

伊藤 千代美さん（いとう・ちよみ）

東栄町生まれ。結婚を機に設楽町へ移住。幼少期から料理を作ることと美味しいものへの好奇心があり、現在は料理を通して人に喜んでもらえることを楽しみにしている。夢はポタポタ焼きのおばあちゃん。

美味しく作るポイント！

①里芋は、ぬめりを取り味を染み込みやすくするため、皮を剥いた後塩洗いをする

②何回も温めて食べるため、味付けは少し薄めにしておくと良い

設楽町は、自然と寄り添い生きる町。

やわらかな風が頬を撫で、
山あいの時はゆるやかに流れる。

一歩外に出れば、
鳥の声、草の香り、小さな命のささやきが
迎えてくれる。

この地に根を下ろす人々の、
温かなまなざしと逞しい手。

自然と人が共に生きる喜び、
それこそが、設楽町の魅力。

ナガサキアゲハ

5年ほど前から設楽町に出没。
温暖化の影響で長崎より北上
して生息しているよ。

アウトドアのまち したら

設楽町は「アウトドアのまち したら」としてその魅力を発信しています。
「アウトドア」のイメージは、キャンプや登山かもしれませんが、設楽町では
屋外で行う行動すべてをアウトドアと定義しています。

探してみよう！
したらの動植物

キンラン

開花時期は4月から5月。上品な
趣で少しうつむく様子が愛らしい。
絶滅危惧種なんだって。

クマタカ

日本では珍しい存在と言われているよ。冠羽（かんう）と呼ばれる頭部の羽毛が特徴。

イソヒヨドリ

以前は海岸沿いに生息していたけど、3 年ほど前から設楽町で観察されているよ。

アナグマ

「クマ」と付くので熊の仲間と思われるけどイタチの仲間。民家の軒先など意外と近くに暮らしているかも。

設楽町の新しい取り組み

仕事

したらワークス協同組合

田舎に興味がある人々に、新しい選択肢を

したらワークス代表理事 / 有限会社麻野間園芸
麻野間 達矢さん（あさのま・たつや）

移住者が抱える重要な課題のひとつは、生活を維持できる収入の確保があります。この課題を解決するために、令和4年10月に設楽町内の5つの事業所が参画し、「したらワークス協同組合」を設立しました。マルチワーカーを雇用し、年間を通じて複数の事業所で働ける仕組みを整えることで、移住希望者に柔軟で安定した働き方を提供しています。田舎暮らしに関心のある人と丁寧につながりながら、移住後も安心して暮らせるサポートも行っています。

今後は組合員の拡大を図り、仕事の選択肢を増やすとともに、住まいの整備にも力を入れ【住みやすい田舎】を実現するために、時代の変化に対応しながら学び続ける姿勢を大切にし、多くの人に設楽町の魅力を伝えていきたいと考えています。「面白がられる地域づくり」を進め地域の未来を共に作っていきます。

村井 李音さん（むらい・りおん）

地域の人たちとの繋がりを深める機会に

大学卒業を前に就職について悩んでいたとき、「マルチワーカー」という働き方を知りました。地元に戻りたいけれど仕事がないのではと不安だった私にとって、社会を知る一歩として「これだ！」と思えた選択でした。実際に働いてみると、自然の中で体を動かすのは気持ちよく、想像以上に楽しかったです。簡単な作業だけかと思っていましたが、社員と同じように扱っていただけて嬉しかったです。

現在は、マルチワーカーとして勤務していた「つぐ高原グリーンパーク」を管理する協会に正社員として働いており、子どもたちのキャンプ支援では大学で学んだ保育の知識も活かせています。地域で挑戦したい方におすすめの働き方です。

work

連携

一般社団法人 ダム際ワーキング協会

ダムとともに地域の未来地図を描こう

私が初めて設楽町を訪れたのは2019年。第一印象は「まるで北欧のような素敵な景色が広がっている土地」であり「一目惚れ」しました。スウェーデンなど北欧諸国の人たちは森と泉の景色を大切に、さまざまな人たちとの学びや対話を嗜み、かつ余白を重んじます。私はかねてから北欧文化好きかつダム好きで、ダムのある地域で学びや対話を軸にした文化創造をしたいと考えていました。そして「みらいび」の空かおりさんと出会い、設楽町にダム際ワーキング協会を設立。全国各地で社会人と高校生の越境学習、モビリティを活用した地域交通の実証実験などの共創活動に取り組んでいます。

これからダムができる町。だからこそ地域の皆さん、そして地域の外の人たち、時に意外な人たちと対話を愉しみながら新たな未来地図を描いていくことができる。その可能性を私たちも日々感じています。その景色は設楽町のみならず、全国のダムのある山間地の人たちに勇気と笑顔をもたらすでしょう。ここからダムとともに始まるものがたりを、一緒に紡いでいきましょう！

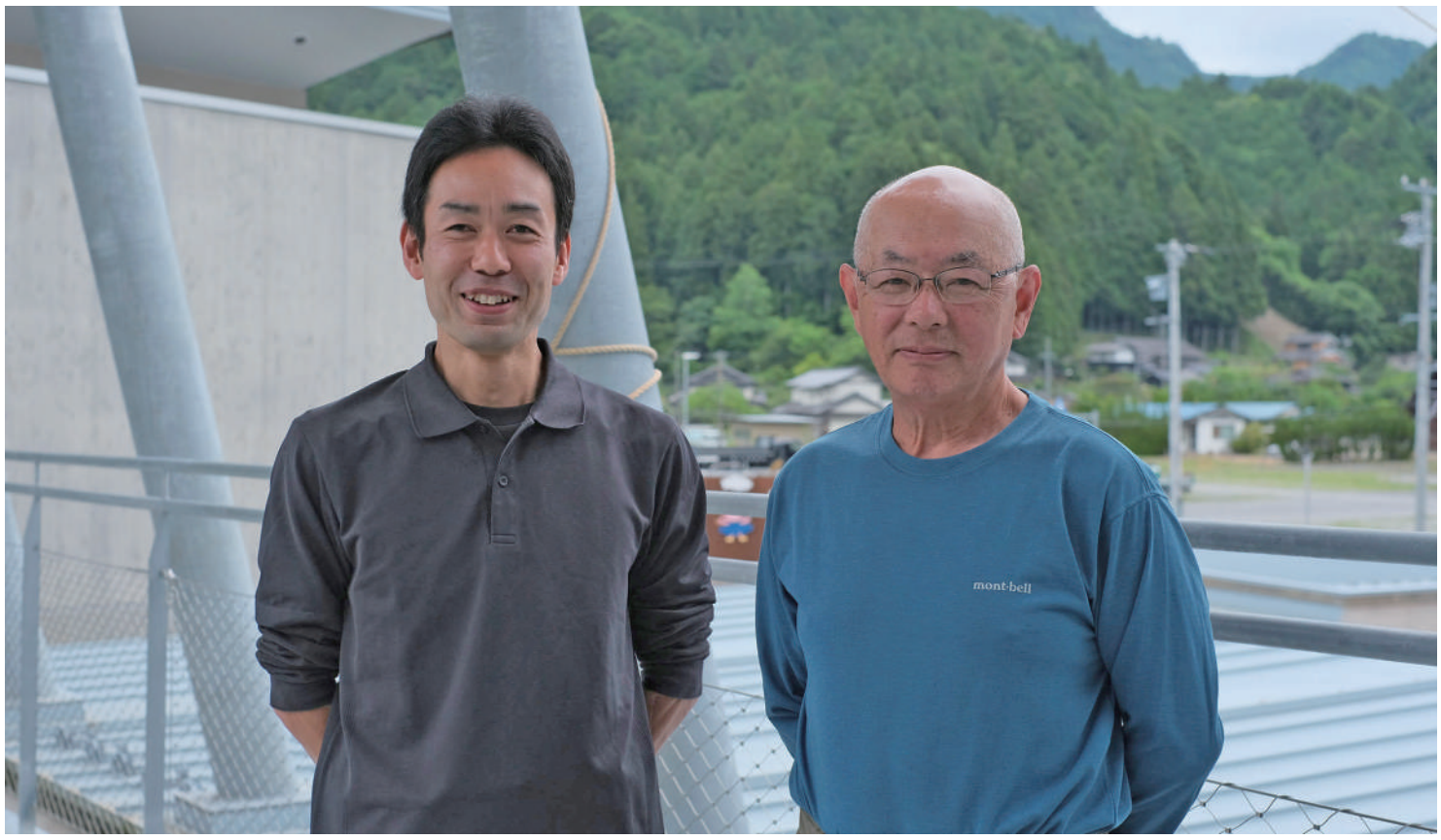
一般社団法人ダム際ワーキング協会
代表理事　沢渡 あまねさん（さわたり・あまね）

alignment

A New Dawn in Shitara

観光

一般社団法人 設楽町観光協会



一般社団法人設楽町観光協会（右）代表 竹下 工さん（たけした・つかさ）/（左）運営統括責任者 高松 哲也さん（たかまつ・てつや）

持続可能な観光地域の実現を目指して

設楽町観光協会は、当地域を訪れる交流人口の拡大に取り組む中、少子高齢化に伴う人口減少による将来への危機感から、事業の継続性と発展を高めるため、一般社団法人に移行しました。

現在は、地域資源の棚卸・磨き上げを行い、従来の観光協会の取り組みを活かしながら、「農泊（農山漁村滞在型旅行）」を中心に、設楽町の自然を最大限に活かした体験プログラムとして、電動自転車サイクリングツアーや川遊び体験など、当地域ならではの自然体験プログラムを事業展開しています。人口減少が進む中、「都市と農村の交流の場の提供」、そして「次世代を担う子ども育成の場」としての機能を果たすことで、来訪者の増加による地域経済の維持発展、来訪者のリピーター化により、関係人口の創出に取り組んでいます。今後も、地域住民の方が生き生きと暮らしていける環境の創出を行うため、「地域活性化」に取り組み、「持続可能な観光地域」の実現を目指してまいります。

tourism

編集後記

最後までお読みいただきありがとうございました。社会の形が大きく変わる今、次の10年につなぐために奥三河地域デザイン編集部が誌面構成を考え、自ら取材、制作しました。今後もこういった挑戦が生まれてくる町でいられるように、温かく見守って、応援していただければ幸いです。

設楽町企画ダム対策課　アウトドアまちづくり推進室　室長　加藤 志歩

special thanks

有吉 祐介（earlygoodcamp）・遠山 和美・JA愛知東女性部北設支部「やまなみ工房」・加藤 博俊・三根 真吾・依田 紋佳（AAAAdesign）・郡元 朱音

奥三河地域デザイン編集部
（地域おこし協力隊）

企画編集：徳山 雅美
制作進行：山田 幸子
デザイン：早坂 安未

『SHITARA』合併20周年記念誌

編集：奥三河地域デザイン編集部
発行：令和7年10月
発行元：設楽町

合併 20 年のあゆみ

2005　平成 17 年度

10 月　1 日　新設楽町誕生
10 月　23 日　町長選挙が行われ、加藤和年氏が初代町長となる
11 月　20 日　奥三河総合センターにて合併記念式典を開催

2006　平成 18 年度

1 月　1 日　「町の木(ブナ)」「町の花(シャクナゲ)」「町章」を制定

2007　平成 19 年度

3 月　22 日　名倉小学校新校舎竣工

2008　平成 20 年度

2 月　5 日　設楽ダム補償基準妥結・建設同意調印式
3 月　18 日　北設楽郡公共交通活性化協議会設立

2009　平成 21 年度

10 月　18 日　町長選挙が行われ、横山光明氏が初当選

2010　平成 22 年度

5 月　25 日　田口ヘリポート竣工
10 月　17 日　設楽町・田原市姉妹提携 20 周年記念式典

2011　平成 23 年度

5 月　28 日　設楽花の山公園事業開始

2012　平成 24 年度

4 月　5 日　清嶺保育園新園舎竣工

2013　平成 25 年度

3 月　31 日　ダム水没区の川向区閉区式
11 月　24 日　ダム水没区の大名倉区閉区式
12 月　21 日　設楽町公式マスコット「とましーなちゃん」デビュー
1 月　6 日　役場新庁舎での業務開始

2014　平成 26 年度

4 月　25 日　田峯小学校校舎が登録有形文化財に登録
10 月　18 日　ダム水没区の八橋区閉区式
1 月　30 日　東三河広域連合発足

2015　平成 27 年度

6 月　6 日　岩古谷トンネル（国道 473 号設楽バイパス）開通
10 月　3 日　合併 10 周年記念式典

2016　平成 28 年度

4 月　1 日　名倉保育園新園舎竣工
11 月　15 日　東三河森林活用協議会の発足

2017　平成 29 年度

6 月　26 日　郵便局と地域の情報提供に関する協定
12 月　6 日　田口宝保育園竣工式

2018　平成 30 年度

11 月　3 日　北設楽花祭保存会
高円宮殿下記念地域伝統芸能賞受賞

2019　令和 1 年度

7 月　12 日　鮎美橋（町道田内清崎線）開通

2020　令和 2 年度

11 月　6 日　田原市・設楽町姉妹提携 30 周年記念式典

2021　令和 3 年度

5 月　13 日　道の駅したらオープン
6 月　1 日　八橋斎苑供用開始
10 月　17 日　町長選挙が行われ、土屋浩現町長が初当選

2022　令和 4 年度

5 月　17 日　設楽ダム工期延長発表
5 月　29 日　広域農道奥三河線（2 期地区）開通
11 月　11 日　WRC が開催、設楽町内がコースとなる

2023　令和 5 年度

3 月　22 日　田峯小学校閉校式
3 月　24 日　津具中学校閉校式

2024　令和 6 年度

9 月　27 日　「ノーコード宣言シティー」宣言
11 月　23 日　設楽ダム本体工事着工式